

戦争を知らない世代へ 33 富山編

富山の熱い空

——富山大空襲の記録——

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ ③③ 富山編

富山の熱い空

——富山大空襲の記録——

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ㊦

富山の熱い空——富山大空襲の記録

昭和52年8月2日 初版第1刷発行

編者◎ 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

振替 東京5—117823 電話 03(294)8731 (代)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社 星共社

1977 Printed in Japan

0036—7033—4438

発刊の辞

戦争——人間にとってこれほど、残酷で悲惨で不幸をもたらす愚かな行為はない。

『富山大空襲』——それは昭和二十年八月二日未明に、衝撃的に起こり、一夜にしてわが郷土を廃墟と化してしまった。B 29爆撃機による破壊力はすさまじく、無数の焼夷弾による包囲攻撃はまさに皆殺し作戦そのものであった。一瞬にして三千人の市民が、焦熱のなかで死んでいく阿鼻叫喚のさまは、「戦争はサタンの行為である」との言葉を立証してあまりある。負傷者は八千人にも及んだ。富山市の被害率は一千人当たり死者十三・五人、負傷者四十七人で全国被災都市の平均被害率（一千人当たり死者八・七人、負傷者十三・三人）を大きく上まわる悲惨さであった。

当時三歳であった私の脳裡にも、あの凄惨な光景は鮮明に焼きついて離れない。私の家は市街地より約八キロ離れた海岸沿いにあり、空襲は免れたものの恐ろしさに防空壕で身を震わせながら、じっと息をひそめていた。そして砂浜に逃げ、ふと振り返って眺めた東の夜空が、まるで血の壁のように真っ赤に染まった光景は、私の臉に今も残っている。

私の父は徴用でかり出されて、戦争中の貧困な食糧事情と過労で胸を冒されてしまった。物資の不足で医薬品も手に入らず、年老いた祖父と祖母、幼い五人の子供を残し、遂に三十七歳の若さで他界してしまった。その後の母の辛労は、筆舌に尽せぬものがあった。

私たち創価学会青年部は、生命尊嚴の理念に貫かれた仏法信仰者としての社会的責任の立場から、すべての人びとが二度と戦争を起こしてはならない、という原点に立って、これまで反戦平和運動を展開してきた。その活動の一環として、本年は、富山大空襲の日を記念し、体験集「富山の熱い空」を発刊するはこびとなった。

炎のなかでもがき、苦しみ、必死の思いで逃げのびた人たちの体験集に目を通す時、戦争への怒りが生命の底から込み上げてくるのを禁じ得ない。

ここに寄せられた被災者の生命からの叫びが読者の心を動かし、一波が万波となって反戦平和への運動が深く広く持続されていくことを念じてやまない。

最後に、本書にご寄稿くださった皆様に心から感謝申し上げる次第である。

昭和五十二年八月二日

創価学会青年部

富山県青年部長 牧 稔

目次

発刊の辞

第一章 焼夷弾の雨降る焦熱の街

一夜にして瓦礫の街に……………	阿閉信子	10
「見てはいけないノ」……………	須藤秀子	13
背中の子供が燃えているノ……………	沢 フミ	16
炎の海を逃げまどう人びと……………	牧野 孝	21
B 29 が悪魔に見えたノ……………	家城辰郎	25
川が燃えているノ……………	金岡ヨネ	31
猛火で温む神通川……………	谷口智恵子	34
焼夷弾がわが家を直撃……………	和田喜代枝	37
恐怖のB 29 からの逃亡……………	吉長元一	41
私の前で人が死んでいく……………	正治みどり	44
悪夢の一夜を逃げのびて……………	石坂鈴歌	46
川の中で明かした爆撃の夜……………	中田愛子	48

焼夷弾から必死で逃げた夜……………	松田トミ	50
川の中に避難した身重の妻……………	江尻善造	53
燃える橋と舟にはさまれて……………	榎 貴美子	57
逃げてしまった上官たち……………	九里正雄	60
逃げ道の橋が燃え落ちて……………	小林りつ子	62
怒濤のごとく逃げる人波……………	三輪外次郎	64

第二章 廃墟の街にたたずんで

瀕死の友になす術もなく……………	吉田孝治	68
恐ろしい朝……………	老田芳治	73
救援もできなかった軍隊……………	山本才一郎	78
熱気と悪臭のなかで……………	前川深雪	82
呉羽山から見た空襲……………	長 峰 緑	85
死体が浮かぶ松川……………	梶谷ふみ	88
不発弾が爆発したために……………	中川政二	91
残ったのは一丁のハサミ……………	小池博量	95
働かなくなった捕虜たち……………	佐野文雄	98
死亡者名簿に載った私……………	藤畑節子	101

曲りくねった線路……………	石井ひさを	104
神通川原に転がる焼死体……………	林 清志	106
わが子の亡骸を背負う人……………	松本喜美代	110
焼夷弾を投げ返した夫……………	笹山 キヨ	113
陸軍看護婦としての日々……………	酒本 みよ	116
わが家は病院に早変わり……………	須藤 光夫	120

第三章 肉親の屍を見つめた悲しみ

子供たちと抱き合う焼死体……………	南出二三子	124
私の名を呼びながら死んだ母……………	谷口 朝子	128
27年目に白骨で戻った母と妹……………	富崎 照子	130
わが子を二人も奪った戦争……………	青木 数倚子	132
「主人を返してくださいノ」……………	津川 ツギ	135
母のあとを追うように死んだ父……………	稲垣 啓三	138
馬の蹄に蹴られて即死……………	泉 外枝	143
死体からもれる無気味な音……………	永戸 賢司	148
思い出すのもいまわしい……………	加藤 つた	151
火だるまになった従姉……………	熊本美千代	154

防空壕を掘ると焼死体があった……………	三橋 銀作	158
変わりはてた黒焦げの義弟……………	浅岡百合子	162
「水、水……」といって死んだ妹……………	内山トシ子	166
小さな身体に焼夷弾が……………	岡田喜二	169

第四章 忘れえぬ幼き日の恐怖

炊き出しに群がる罹災者……………	深川 慶市	174
父は戦死、母は三年後に病死……………	中福紀代美	176
父と見た焼跡の光景……………	高橋文江	178
病身の母と弟妹を連れて……………	江尻 興輔	180
防空壕で明した恐怖の夜……………	近江 長蔵	182
母の手にしばられて避難……………	平田 清範	185
子供の尿で火傷の手当て……………	黒崎 雅子	188
縄で足をしばった死体……………	館井 博子	191
痛ましい少女の焼死体……………	古谷 裕保	195
神通川を漂う死体の群れ……………	福村 伸	199
道端に取り残された死体……………	澤 桂子	203
臉に焼きつく悲惨な光景……………	福井 諭吉	207

十枚の布団を集めて一枚に.....	上田喜美	210
焼跡の釘拾いをした日々.....	山崎厚子	213

第五章 長かった苦難の日々

夫の戦死とどん底の生活.....	古本ミドリ	218
乳も出なくなってしまう.....	若松一子	221
住む家も食べ物もない毎日.....	光岡美登里	224
不自由な身にかぶさる貧困.....	安田豊治	226
焼死した十数頭の乳牛.....	日俣セツ	228
日本の勝利を最後まで信じて.....	田添幸三郎	230
流れ弾で燃えたわが家.....	熊本三千代	232
“焼け出され”と馬鹿にされて.....	前川菊枝	235
星が見えるバラック住まい.....	北沢義政	239
敗戦の混乱のさなかで.....	四宮ハツ子	242
空襲で失った代々の家業.....	丸山秀三	246

あとがき

年表・富山大空襲史と罹災概況

第一章

焼夷弾の雨降る焦熱の街

一夜にして瓦礫の街に



阿閉 信子（51歳）

昭和二十年八月二日未明、あの生命がしばんでいくような恐怖の富山大空襲——あれからもう三十余年の歳月が流れましたが、その地獄絵図は時折、私の脳裡に鮮明に浮かんで、消え去ろうとはしません。

当時、軍需工場であった不二越に動員されていた私は、稲荷町の親戚の家に住んでいました。夜半、無気味な空襲警報のサイレンが鳴り響きました。すぐさま防空壕に飛び込んだ私たちの耳に、上空を旋回する編隊を組んだB 29の爆音が轟き、あちこちに起こる大きな爆発音が聞こえてきました。街はすでに燃えていました。私たちは夜空を真っ赤に焦がす火炎に身の危険を知り、壕の外へ転がるようにして出ました。頭の上にはすさまじい勢いで火の粉が飛び、足元に舞い散りました。私は恐ろしさにただ夢中で逃げまわりました。途中、親戚の人たちを見失い、一人ぼっちになってしまいました。すっかり混乱した頭でなおも逃げ場を求めて必死に走りました。空

襲の恐怖のきなかでは、それはあまりにも無力で弱々しい人間のうごめきでした。

いつしか川の土手に着いていました。そこはあたかも避難場所でもあるかのごとく、たくさんの人びとがたむろしていました。私も恐ろしさに震えるわが身をやっとの思いで草の上に落ち着かせたのですが、そこで見た光景もまた地獄でした。狂ったように子供の名を呼びつづける母親、そして離ればなれになった親を捜して泣き叫ぶ子供たちの姿――。

街はゴーゴーと音をたてて燃えさかり、すでに紅蓮の海でした。その真昼の明るさを思わせるような火炎に照らされて、雨のように焼夷弾を降らしつづけるB29の機体のはっきりと浮かびあがりました。投下された焼夷弾が大きな爆発音とともに火球となって瞬時に燃え上がるさまは、十八歳の私にはあまりにも強烈な衝撃でした。

夜が明けると町はことごとく瓦礫^{がれ}の山と化していました。家へ帰ろうにも、その方向さえもわかりません。やがてそんな瓦礫の町に真夏の太陽が容赦なく照りつけます。さらに火炎の余熱が加わり、その暑さはそれこそ焦熱地獄を思わせました。私は防空頭巾をすっぽりとかぶり、身体が焦げるような熱気のなかを、会う人ごとに方角をたずねては父母の待つ家へと急ぎました。あちこちに焼けただれた土蔵だけが残っていて、そのなかからはまだ炎が吹き出ていました。護国神社の近くまで来たときには、思わず足がすくみました。何頭もの大きな馬が真っ黒に焼けて倒れていたからでした。

私はいまも当時を思い起こすたびに、恐怖で背筋が寒くなります。二度とあの悲惨な戦争を起こさないためにも、自分の体験を次の世代に語り継いでいきたいと思っています。

「見てはいけない！」



須藤 秀子（44歳）

当時、私は十二歳。いまだいえば中学一年生ですが、学校は空襲警報が鳴った翌日には休みになるという状態でした。夜はやはり警報のため落ち着いて寝ることもできず、服を着たまま寝床につく日々がつづいていました。その頃、家は両親と二人の姉、それに弟との六人暮らしでした。長兄は召集ですでに戦地にあり、次兄は予科練へ行っていました。父はつねに「防空壕はかえって危ないから、絶対に入ってはいけないよ」といい、また「死ぬときは全員一緒だ」といって、疎開もしないでいました。

その夜は月の明りで、人の顔がとてよく見えました。十時頃、空襲警報が鳴りましたが、そのときはなにごともなく、十一時には解除になりました。しかし虫の知らせか、私はその夜に限ってなかなか寝つくことができませんでした。しばらくすると再びサイレンが鳴り渡り、つづいてものすごい爆音とともに、呉羽山くれはやまの方角が急に明るくなりました。屋根に登って見張りをしていた近所の人が、「こっちに来るぞ、逃げろ」と怒鳴っているのが聞こえてきました。あわ

てて逃げる準備をしているうちに、あたりはもう焼夷弾の雨にさらされていました。私たち家族は、人波にもまれながら必死で逃げました。父だけは町内を守るのだといって残りました。

突然、私の目の前に照明弾が落ちてきて、パッと閃光が走りました。あまりの恐怖に足がつかばって動くことさえできず、反対に照明弾のほうへ身体がひきつけられそうになりました。そんな私に気づいた姉が、強い力で引っぱってくれたので、やっと正気に返ったのでした。

逃げる途中、「墓のほうへ逃げたらだめだ、月の影へ入って逃げろ」と、だれかが叫ぶのが聞こえました。やっとの思いで大泉まで来ると、まわりの田んぼはやはり逃げて来た人の群れでごったがえしていました。いつのまにか母とはぐれてしまっていた私は、いちち川沿いの道を上手へと進んでいきました。川に飛び込むと、「そこは危ない。川に入るな」と怒鳴られて、またはいあがるのでした。そのうち頭からかぶっていた布団の重さに耐えきれなくなり、捨ててしまいました。

四方を火で囲まれたときには、動けないほどに疲れ果てて、そのままあたりにいた人たちと、一稲田のなかで車座になり、ただじっとしていました。稲が横なぎにゆれていました。夏なのになぜこんな風が吹くのだろうか——そう思って仰いだ空には、B 29 が三機、正三角形の編隊を組んで飛んでいました。

しばらくすると、寒くなってきました。近くの畦に落ちている布団を取りに行こうと立ち上が